

京鹿子

京都府立総合文化センター
京鹿子 2月号 1,000円
京都府立総合文化センター



2月号

— 近 詠 —

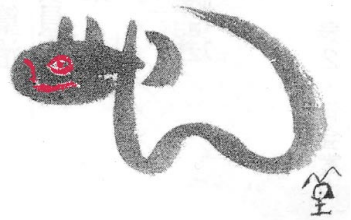
冬眠中 丸山佳子

思はざる至福に一封竹の春

菊花展に立礼すがし脚美人

文化祭の孔雀三羽に土産なし

いつの世も女はらしく水引草





ア
ン
ケ
ー
ト
に
一
筆
そ
ぞ
ろ
十
二
月

忘
年
会
へ
富
士
の
高
さ
の
ト
ン
ネ
ル
抜
け

冬
峰
の
望
遠
鏡
も
冬
眠
中

こ
の
木
ま
で
岩
を
枕
に
冬
眠
中

蛇
穴
に
わ
た
し
植
物
園
に
ひ
た
る

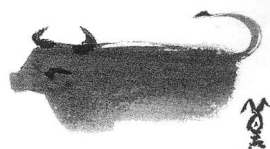
迎
春
す
鞍
馬
み
寺
の
宝
曆
に

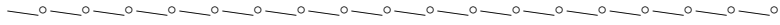


豊 田 都 峰

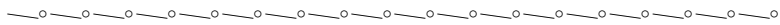
清響集 その九十四

黄 落 の そ の ひ と ひ ら に な つ て ゐ し
実 生 な る 万 両 と し て 日 を は じ く
万 両 や 山 陵 の 磴 苔 む し て
ふ た み ひ ら 舞 ふ 小 春 日 の 里 林
ふ た み ひ ら 赤 き 木 の 葉 は 里 だ よ り
天 か ら の は は そ 落 葉 と 拾 ひ け り





川筋のゆどうふ窓をくもらせて
湯どうふの具を遊ばせてひとり酌む
一痕の月冴ゆ嶽を従へて
月冴ゆる木立はかげと徹しきる
月かげも及ばぬあたり蛇冬眠
赤燈がビルのかたちに年暮るる
賀状句
初日の出正調牛歩を願ひとす



秀華採集

神と人同じ旅寝や村祭

沼田巴字

神は客人（まらうど）であり、田作りのころになると田へ、稔りの頃になると村へやってくるという考えがある。そんな学説を思わせる神への接待が伺える「村祭」がよい。

櫟の実兄がゐさうで投げ返す

井上菜摘子

ふかぶかと月の寄せ棟造りかな

鎌田政利

亡兄へのせつないまでの思いが具体的な動作で表出、「寄せ棟造り」は大棟、ために「ふかぶかと」がふさわしく月で一段と影が深い。

鈴鹿 仁

雑煮椀

蕪忌の華やぐものに蒔絵筆
着ぶくれし己れの影の他人めく
人の世の不思議もありて虎落笛
虎落笛ないないづくしの唄となり
雑煮椀継がれ家宝の貌である
歳取るは円くなること初昔
万両やことば色もつ禅問答

近 詠

宇都宮滴水

海女の里

むすめ海女一ときわ高く笑ひけり
破れ波止にあそぶ小波は夏のもの
さくら貝波の誘ひに気を赦す
涼しさのやはき目覚めへ舟戻る
夏の海旺日忘るる母の郷
波あそび姦まし子らは声濡らす
海女焚火貝のことより孫のこと

神麓集



新関一杜

きさらぎの墓石一群に迷ふのみ
ふるさとに戻りて熱き納豆汁
なくなりし祖父の座あけて囲炉裏端
雪沓に入れやう赤き唐辛子
大吹雪やみて黙せる樹氷林

落葉 柴田朱美

落葉舞ふ母のぬくみの火消壺
ふところに落葉を溜めて競ひあふ
脳細胞減りゆくばかり降る落葉
朴落葉悲しいときは火を焚けり
落葉飛ばしお国訛りの風が吹く

有 伊藤希眸

トルソーに有情紅葉の降りつづく
山もみぢ有象無象として杖を
晩秋や有酸素体操ぼてりぼたり
有難し鏡のなかに曼珠沙華
有事となそれ隼人瓜熟れてゐる

禰寝瓶史

こう鶴の餌嘴高く万歳す
こう鶴の垂直離陸刈田風
冬菜畑あつけらかんとブルが消す
短日の時計の主張入院拒否
投錨音今は昔の牡蠣の海

船越美喜

ふるさとへ帰り笛ふく村祭
露散るや幸せといふ脆きもの
知りつくし知らぬがほとけ藪虱
たあいなく暮れ立冬の星生まる
たそがれの音ともならず冬の雨

冬 隣 荻野千枝

しのび寄る秋冷よわひ重ねつつ
コスモス満つ恋なき老の恋ごころ
花八ツ手グーチヨキパーのパー好み
わが星はジエミナよ秋の声ダブる
政変の彼方あやふし冬隣

神麓集



喉 仏 丸 井 巴 水
荒積みの石材が好き昼ちちろ
髭剃つて師走の予定ひとつ足す
骨の無き手袋と辞書鷲掴む
十二月八日は尖る喉仏
片頬へ刺さる寒波のなじみ橋

冬に入る 川崎光一郎
独居てふ自由不自由冬に入る
禰宜ひとり鳩に豆撒く神の留守
焼芋の熱さよ飢ゑし日の記憶
枯れのなか磯馴れの松の孤高かな
枯れてゆく木々を諾ふ風の唄

蘘 森 津 三 郎
沈床を敷き替えてる秋の晴
柿に網かけつばなしの田舎かな
慈姑まだ掘るには早い葉のやはさ
好きなかだけ切つてお帰りコスモス園
蘘のすくすく伸びる下校時

薄 命 松 本 鷹 根
百舌鳥独り河は一途に黙を押す
疏水果つ伏見に秋を滾らせて
稲架のびる視界飛行雲に譲る
冬隣影も持たずに祇園抜く
薄命の淡く鮮やか帰り花

含紅抄 その四 沼田巴字
吊橋でこみあつてゐる紅葉山
人は人己はおのれ柚子は黄に
敗荷のかたちいろいろ最晩年
弾丸を秘めてゐるなり冬の雲
たがために鐘は鳴るなり枯れ蓮

七輪に熱爛こぼれ聖夜かな 寛
粗塩と一盞の酒聖夜かな
鳶青年第九つらぬく冬の門
汐派手の少女するりと歳の市
クリスマスイヴ日本人ばかりかな



京鹿子集

豊田都峰選

神と人と同じ旅寝や村祭

前生のわが声となるすがれ虫

草よりも空に恋する秋の蝶

藁塚は一步も出でず影法師

冬隣柵を直すを一步とす

父といふ容れもの風の刈田かな

栗の秋水こぼしつづ山墓へ

先約があり鯛雲置きざりに

不審者が不審者をみる芒原

櫟の実兄がぬさうで投げ返す

奈良 沼田 巴字

亀岡 井上菜摘子

ふかぶかと月の寄せ棟造りかな

波の穂の寄ればむつみてくだけ月

欠け月へ洒落てふ窓は半部に

刈田闇臥牛にまがふ野積み藁

くわんをんのなよ腰秋を濁きをり

朝霧やドナウの流れ機上より

夕霧やヴェイオラ抱へてピザ食む娘

学会終へ医師は黄葉踏みオペラ座へ

同い年わかりて騒ぐ秋の宴

異国にてお下がり賜ふ冬ぬくし

京都 鎌田 政利

アリソナ 伊吹 之博